

〔波ツカ〕〔弥己カ〕
 尔佐久 乃□□ 夫〔己母利〕〔伊カ〕
 〔己カ〕 知知屋 屋屋 屋屋 屋屋

(344) × 34 × 3 019

難波津の歌の新資料

— 姫路市辻井遺跡出土木簡の再釈読 —

はじめに 史料研究室では、各地の調査機関の依頼をうけ、全国の遺跡から出土する木簡の釈読及び調査研究に協力している。小稿は、近年行なった保存処理済木簡再調査における釈読成果を紹介するものである。

難波津木簡の釈読 図59は、姫路市教育委員会が1985年に行なった、辻井遺跡の調査で出土した木簡である¹⁾。出土当时には片面に薄い墨痕が確認され、習書木簡と推測されていた(山本博利・秋枝芳「兵庫・辻井遺跡」『木簡研究』8、1986年)。保存処理後、赤外線テレビカメラ装置を用いて観察したところ、従来墨痕が認められなかった面にも墨痕があり、比較的明瞭な「己母利」を手がかりに読みすすめた結果、その内容は難波津の歌が記されたものと判明した。表面末尾の文字は、「伊」の残画で、折損した部分に第4句「いまははるべと」が続いた可能性が高い。裏面は、「己」「知」「屋」の習書である。

難波津の歌の資料 出土文字資料などに記された難波津の歌は、その可能性のあるものも含め30件余の事例が報告されている。うち、下の句まで記された事例は、藤原京跡左京七条一坊西南坪(飛鳥藤原第115次調査)、平城宮跡(平城第316次調査)、高岡市東木津遺跡の出土木簡など数例に限られていた²⁾。本資料は、下の句まで記した難波津木簡としてはもっとも早く出土したもので、奈良時代前半における畿内近国での文字文化の伝播を考えるうえでも、貴重な事例といえよう³⁾。(山本 崇)

注

- 1) 辻井遺跡の1982年・85年の調査で出土した木簡7点のうち、奈文研が2004年度に行なった再調査で、6点の釈読を進めることができた。最新の釈文は、姫路市史編集専門委員会編『姫路市史史料編古代中世1』(2005年)に掲載されている。
- 2) 奈文研『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』16、2002年。同『平城宮発掘調査出土木簡概報』36、2001年。高岡市教育委員会『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』2001年。
- 3) 難波津の歌の資料は、東野治之「平城京出土資料よりみた難波津の歌」(『日本古代木簡の研究』塙書房、1983年)、森岡隆「仮名発達史における難波津の歌」(『書学書道史研究』9、1999年)、川崎晃「『越』木簡覚書」(『高岡市万葉歴史館紀要』11、2001年)、同「気多大神宮寺木簡と難波津歌木簡について」(『高岡市万葉歴史館紀要』12、2002年)、八木京子「難波津の落書」(『国文目白』44、2005年)などを参照。



図59 辻井遺跡出土木簡 1:2
 (左:赤外線デジタル写真 右:可視光写真 中村一郎撮影)